

【 割禮祭のトロパリ 第1調 】

かがやけるほうざに、いとたかきに、
輝 寶 座 至 高

むげんのちちとしんせいなるなんぢのしんとともにざ
無 限 父 神 聖 爾 神 共 坐

するイイススよ、なんぢはあまんじて、おっ
爾 甘 夫

とをしらざるどうていぢよなんぢのははより
識 童 貞 女 爾 母

ちにうまれたり。ゆえにようかめ
地 生 故 八 日 目

のひととしてかつれいをうけたまえ
人 割 禮 受 給 え

り。ゆいいちひとをあいするしゅよ
惟 一 人 愛 主

こうえいはなんぢのじんじなるおもんぱかりにき
光 榮 爾 仁 慈 慮 歸

し、こうえいはなんぢのめぐみにきし、
光 榮 爾 恵 歸

こうえいはなんぢのかんようにきす。
光 榮 爾 寛 容 歸

【 聖大ヴァシリイのトロパリ 第1調 】

なんぢのこえはぜんちにつたわり、ぜんち
 爾聲全地傳全地
 はなんぢのことばをうけたり、なんぢはこれ
 爾言承爾此
 をもってかみにかなうおしえをしき、
 以神適お教布
 ばんぶつのせいをあきらかにし、ひとのふうぎ
 萬物性闡人風儀
 をおさめたり。おうたるしさいはん、
 修王司祭班
 こくしょうなるしんぷよ、ハストスカみに
 克肖神父、ハストスカみに
 われらのたましいのすくわれんことをいのりた給
 我等靈救祈給
 まえ。

【 聖大ヴァシリイのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
 光榮父子と聖神歸
 す、
 かみのしあいなるこくしょうしゃヴァシリイよ、
 神至愛克肖者

なんぢ はきょう か い の う ご か ざ る も と い と あ ら
 爾 教 會 動 基 顯

わ れ て 、 しゅ う じ ん に う ば わ れ ざ る し さ ん を わ
 衆 人 奪 贖 産 頒

か ち 、 なん ぢ の の り を も っ て こ れ を い ん
 爾 則 以 之 印

せ り 。

【 割禮祭のコンダク 第3調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世

ば ん ゆ う の しゅ は か つ れ い を し の び 、 じ ん じ な
 萬 有 主 割 禮 忍 仁 慈

る も の と し て じ ん る い の ざ い か を た ち て 、
 者 人 類 罪 過 斷

こ ん に ち す く い を せ か い に た も う 。 い 至
 今日 救 世 界 賜

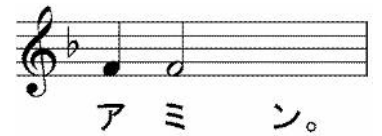
と た か き に は ぞ う ぶ つ しゅ の し さ い しゅ 、
 高 造 物 主 司 祭 首

ハ ス ト の お う ぎ に た つ す る も お の 、 こ う め い
 奥 義 達 者 光 明

に し て し ん せ い な る ヴ ァ シ リ イ も よ ろ こ ぶ 。
 神 聖 喜

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいしょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢょこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖神、聖勇毅、聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常生者、我等憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖神、聖勇毅、聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常生者、我等憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。こうえいはちとことせいしん
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：^{しゅ}主の名に依りて來たる者^なは崇^よめ讃^きめらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾^{もの}は其國^{なんち} ^{そのくに}

の光^{こう}榮^{えい}の寶座^{ほうざ}に在りて恒^{つね}に崇^{あが}め讃^ほめらる、今^{いま}も何時^{いつ}も世^よ世^よに、)

【 ^{プロキメン} 提綱 割礼祭の第6調 及び聖人の第1調 】

司祭) ^{つつし}慎^きみて聽^{しゅうじん}くべし、衆^{へいあん}人に平安、

誦經) ^{なんち}爾^{しん}の神にも、

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{しゅ}プロキメン、主よ、爾^{なんち}の民^{たみ}を救^{すく}い、爾^{なんち}の業^{ぎょう}に福^{ふく}を降^{くだ}し給^{たま}え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) ^{しゅ われなんぢ よ われ かため わ ため もだ なか} 主よ、我 爾 に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業
ふくをくだしたまえ。
福 降 給

誦經) ^{わ くち えいち いだ わ こころ おもい ちしき いだ} 我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん、

わがくちはえいちをいだし、わがこころ
我 口 睿 智 出 我 心
ろのおもいはちしきをいださん。
思 智 識 出

【 アポストロス
使徒經 254 端 コロサイ書2章8節~12節
318 端 エウレイ書7章26~8章2節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しょ よみ} 聖使徒パヴェルがコロサイ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい つつし ひと したが ひと いでん したが よ げんこう したが} 兄弟よ、慎め、人が、ハリストスに 循 わずして、人の遺傳に 循 い、世の元行に 循

^{りがく くうじゅつ もつ なんぢら まど ため けだしんせい じゅうまん ことごと じつ} う理學と空術とを以て、爾等を惑わさざらん爲なり。蓋 神性の充滿は悉く實

^{たい もつ お なんぢら かれ すなわちおよそ しゅりょうけんべい かしら もの あ} 體を以てハリストスに居るなり。爾等も彼、即 凡の首領權柄の首たる者に在

^{じゅうまん かれ あ なんぢら またて もつ かつれい う すなわち} りて、充滿せられたり。彼に在りて、爾等は亦手を以てせざる割禮を受けたり、即

にくしん つみ たい ぬ ところ かつれい せんれい もつ なんぢら かれ とも ほうむ
肉 身 の 罪 の 體 を 脱 ぐ 所 の ハリスツスの 割 禮 なり。洗 禮 を 以 て、爾 等 は 彼 と 偕 に 葬

またかれ し ふくかつ かみ ちから しん もつ かれ とも ふくかつ
ら れ て、亦 彼 を 死 より 復 活 せ し め し 神 の 力 を 信 ず る を 以 て、彼 と 偕 に 復 活 せ り。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである。彼はすべての支配と権威とのかしらであり、あなたがたはまた、彼にあって、手によらない割礼、すなわち、キリストの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てたのである。あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである。

けいてい およそ しさいちょう ささげもの まつり けん ため た ゆえ かれ またけん
誦經) 兄 弟 よ、凡 の 司 祭 長 は 禮 物 と 祭 祀 と を 獻 ず る が 爲 に 立 て ら る、故 に 彼 も 亦 獻 ず

もの べき 物 な かる べ か ら ざ り き。彼 若 し 地 に 在 り し なら ば、司 祭 と 爲 ら ざ り し なら ん、蓋 此 に は

りつぼう したが ささげもの けん しさいら てんじょう もの かたち かげ ほうじ もの
律 法 に 循 い て 禮 物 を 獻 ず る 司 祭 等、天 上 の 者 の 形 と 影 と に 奉 事 す る 者 あり、モ

そのまく つく とき つ ごと いわ つつし やま おい なんぢ しめ
イ セ イ に 其 幕 を 造 ら ん と せ し 時 に、告 げ ら れ し が 如 し、曰 く、慎 み て 山 に 於 て 爾 を 示

のり したが いっさい つく しか かれ いまさら まさ ほうじ え さら
さ れ し 式 に 遵 い て、一 切 を 造 れ と。然 れ ど も 彼 が 今 更 に 優 れ る 奉 事 を 得 た る は、更 に

よ きょやく もとづ さら よ やく ちゅうほしや な かな
善 き 許 約 に 基 け る 更 に 善 き 約 の 中 保 者 と 爲 り し に 稱 う。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない。そこで、もし彼が地上におられたなら、律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。

【 アリルイヤ 割禮祭の第8調 】

なんぢ へいあん
司祭) 爾 に 平 安、

なんぢ しん
誦經) 爾 の 神 に も、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{ぼくしゃ} イズライリの牧者よ、^{みみ かたぶ} 耳を傾けよ、^{ひつじ ごと みちび もの} イオシフを羊の如く導く者よ、^{おのれ あらわ} 己を顯せ、



誦經) ^{ぎじん くち えいち い} 義人の口は睿智を言い、^{そのした ぎ かた} 其舌は義を語る、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書6端 2章20~21、40~52節

ルカ福音書 24 章 17~23 節】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時牧者は、凡そ彼等に告げられし如く、聞きし事見し事の爲に、

神を讚榮讚美して返れり。八日満ちて、嬰兒に割禮を行ふべき時至りたれば、其名

をイイスと名づけたり、即其未だ孕まれざる先に天使の名づけし所なり。子は漸

く成長し、精神益強健にして、智慧充ち、神の恩寵は彼に臨めり。其父母歳

毎に逾越節筵にイエルサリムに往けり。彼の十二歳になりし時、亦節筵の例に遵い

て、イエルサリムに上りしに、日卒りて返る時、童子イイス イエルサリムに留れり。イ

オシフと其母とは之を知らずして、彼は同行者の中に在りと意えり、一日程を行きて、

彼を親戚知己の間に尋ねしに、遇わざりき、乃彼を尋ねてイエルサリムに返れり。三

日の後彼に殿に遇えるに、彼教師の中に坐して、且聴き、且問えり。彼に聞く者皆其

智慧と其應對とを奇とせり。父母彼を見て駭けり、其母彼に謂えり、兒よ、何ぞ我等に

斯く行いたる、視よ、爾の父と我と憂いて爾を尋ねたり。彼曰えり、奚ぞ我を尋ね

たる、豈我は我が父に屬する所に在るべきを知らずや。然れども彼等は其言いし言を

曉らざりき。イイス彼等と偕に下りて、ナザレトに來り、彼等に順い居りき。彼の母は

此等の言を悉く其心に藏めたり。イイスは智慧と齡と神及び人人の寵愛と

ますますすす
に益進めり。

(比較用 口語訳) 羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。八日が過ぎ、割礼をほどこす時となったので、受胎のまえに御使が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた。幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがある上にあつた。さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上つていた。イエスが十二歳になった時も、慣例に従つて祭のために上京した。ところが、祭が終つて帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残つておられたが、両親はそれに気づかなかつた。そして道連れの中にいることと思ひこんで、一日路を行つてしまい、それから、親族や知人の中を捜しはじめたが、見つからないので、捜しまわりながらエルサレムへ引返した。そして三日の後に、イエスが宮の中で教師たちのまんにすわつて、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞く人々はみな、イエスの賢さやその答に驚嘆してゐた。両親はこれを見て驚き、そして母が彼に言った、「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、おとう様もわたしも心配して、あなたを捜してゐたのです」。するとイエスは言われた、「どうしてお捜しになつたのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかつたのですか」。しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかつた。それからイエスは両親と一緒にナザレに下つて行き、彼らにお仕えになつた。母はこれらの事をみな心に留めていた。イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。

司祭) ^か ^{とき} ^{へいち} ^た ^{ここ} ^{そのお} ^{もん} ^と ^{およ} ^お ^{たみ} ^{しほう}
彼の時 イエス 平地に立てり、爰に其衆くの門徒、及び衆くの民、イウデヤの四方イ

^{ならび} ^{うみべ} ^{かれ} ^き ^{ため} ^{かつおのれ} ^{やまい} ^{いや}
エルサリム 并 にティルとシドンとの海濱よりして、彼に聴かん爲、且 己の病の醫され

^{ため} ^{きた} ^{もの} ^{またおき} ^{うれ} ^{もの} ^{かれらいや} ^{しゅうみんかれ} ^{さわ} ^{ほつ}
ん爲に來りし者、又汚鬼を患うる者ありき、彼等醫されたり。衆民彼に捫らんと欲

^{けだしちからかれ} ^い ^{しゅう} ^{いや} ^{かれ} ^め ^あ ^{そのもん} ^と ^み ^い ^{しん}
せり、蓋能彼より出でて、衆を醫せり。彼は目を擧げて、其門徒を視て曰へり、神の

^{まづ} ^{もの} ^{さいわい} ^{かみ} ^{くに} ^{なんぢら} ^{もの} ^{いまう} ^{もの} ^{さいわい} ^{なんぢら}
貧しき者は福なり、神の國は爾等の有なればなり。今飢うる者は福なり、爾等

^あ ^え ^{いまな} ^{もの} ^{さいわい} ^{なんぢら} ^{わら} ^え ^{ひと} ^こ ^{ため}
飽くを得んとすればなり。今泣く者は福なり、爾等笑うを得んとすればなり。人の子の爲

^{ひとびと} ^{なんぢら} ^{にく} ^{なんぢら} ^た ^{かつの} ^{のし} ^{なんぢら} ^な ^あ ^{もの} ^す ^{とき}
に人人爾等を憎み、爾等を絶ち、且 詬り、爾等の名を惡しき者として棄つる時は、

^{なんぢら} ^{さいわい} ^{そのひ} ^{よろこ} ^{たのし} ^{てん} ^{なんぢら} ^{むくい} ^お
爾等福なり、其日に喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり。

(比較用 口語訳) イエスは彼らと一緒に山を下つて平地に立たれたが、大ぜいの弟子たちや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロとシドンの海岸地方などからの大群衆が、教を聞こうとし、また病気をなおしてもらおうとして、そこにきていた。そして汚れた靈に悩まされている者たちも、いやされた。また群衆はイエスにさわろうと努めた。それは力がイエスの内から出て、みんなの者を次々にいやしたからである。そのとき、イエスは目をあげ、弟子たちを見て言われた、「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の國はあなたがたのものである。あなたがたいま飢えている人たちは、さいわいだ。飽き足りるようになるからである。あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである。人々があなたがたを憎むとき、また人の子のためにあなたがたを排斥し、ののしり、汚名を着せる

ときは、あなたがたはさいわいだ。その日には喜びおどれ。見よ、天においてあなたがたの受ける報いは大きいのである。

しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんちにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③（大ヴァシリイ聖体礼儀）へ